

# 海老名弾正の思想と朝鮮伝道論

池 明 観

## はじめに

海老名弾正はその人間と思想において実には広いキリスト者であった。その門下には朝鮮総督府の援助を受けながら、組合教会の朝鮮伝道部長を勤めた渡瀬常吉がいるかと思うと柏木義円とともにそれを批判してやまなかった吉野作造がいた。松尾尊元はかつて「日本組合基督教会の朝鮮伝道」という論文の中で海老名弾正を日本の近代史における自由主義が帝国主義段階に入り「内に立憲主義・外に帝国主義」の姿勢に転化した時代における「組合教会の代表的イデオログ」として捉えた。そして「海老名の帝国主義的側面が、渡瀬常吉により、権力と直結する朝鮮伝道として、一段と拡大された形で継承され、一方、その立憲主義

海老名弾正の思想と朝鮮伝道論

的側面が、吉野作造によって、人民の側に立たんとする民本主義として一段と深化せしめられる」に至ったと見たのであった。<sup>(1)</sup>

海老名は最初から組合教会の朝鮮伝道に積極的であった。しかし柏木義円が渡瀬の朝鮮伝道に対して痛烈な批判を浴せたのに対して、<sup>(2)</sup>彼はどうしてほとんど沈黙したのだろうか。彼の朝鮮伝道論は彼を「拡大された形で継承」した渡瀬との間にどのような違いを持っていたのであろうか。ここで海老名の思想的立場が彼の朝鮮伝道論とどのように結びついていたかが問題にされねばなるまい。それが政治的には「内に立憲主義・外に帝国主義」という時代に仕えたといっても、そこには信仰的な意味において思想的一貫性があったと見なければならぬ。そこで海老名の朝鮮伝道論はどのような内容のキリスト教をどのように伝えようとした

ものであるかが検討されるべきであろう。

海老名は一九一〇年四月三日、組合教会の拡張伝道の一環として、ソウルの皇城基督教青年会において大演説を行った。約千名が集まったこの集会について『基督教世界』（明治43・4・28）はこの「漢城四万の人を覚醒したる」集会における彼の「韓人に対する大演説」は「所説高邁翕然として韓人を靈動し、斯る公平にして熱誠なる宗教家日本にありしやと驚嘆し非常なる好影響を彼等に与へたり」と報告している。この時は日韓保護条約の下で統監政治が行なわれており、日韓併合四カ月前というきわどい時代であった。しかも海老名は日韓併合論者であった。海老名はこの青年会における講演において「拍手急霰の如く時には寂として人なきが如く聴衆をして酔へるが如く感動せしめた」（『基督教世界』明治43・5・5）といわれ、彼自身も四月一五日の大阪基督教青年会館における帰国講演（『基督教世界』明治43・4・28）の中で「靈魂の共鳴」を経験し「実は自分も嬉しきの余り思はず感泣した」と洩らした。

このように調べてくると、一体その時どのようなメッセージを伝えたので、失意の中にあつた韓国人々が感動したのが問題にならざるをえないであろう。またそのような組合教会の朝鮮伝道が、一九一九年三・一独立運動が起ると、全く無に帰したような失敗の道を歩まねばならなかつたというのは、奇異な感じを与えてくれるといえるであろう。ここに海老名弾正の朝鮮伝道論が問題にされ、彼が朝鮮に伝えようとした

キリスト教が問題にされざるをえない。

もともとこの小論をまとめようと思つたのは、一九七五年から三年間、東京女子大学比較文化研究所の「日韓教会関係史」の資料収集という総合研究プロジェクトに参加した時からであった。日本組合基督教会の朝鮮伝道は失敗の記録として残されたが、いやしくもキリスト者の伝道への熱意が単に政治的意図によつてのみ動かされること、ありえようかという疑問が残って頭から離れなかつた。もしもそうであつたならば、その伝道における福音理解、キリスト教理解とはどのようなものであつたであろうか。このような素朴な疑問からこの小論は出発した。海老名弾正については厖大な資料がある。そのすべてに當つて彼の生涯と思想をたどつて整理し、その中において彼の朝鮮伝道論を位置づけるには時間的にも、能力からいっても不可能に近かつた。ここでは周囲にある資料をもとにしてただ一つの問題提起をなしうればと思つている。特に総合研究のプロジェクトが一九二〇年頃までとなつてゐるために、資料面で、それ以後の海老名にはほとんど触れることができないのではないかと思う。

私は常づね人間の思想はその本質的なものが周縁的なこととがらに触れる時に、あらわになるものだと考えてきた。例えば日本人の文化や思想がアジアに触れた場合、その本質的な姿が現われてくるのではないかということである。そのために周縁的なものが歴史から消去されるのでは

なく、歴史の本流に戻されねばならない。少なくともその周縁的なものを消去したまま、歴史や思想を全体として示す犯罪を犯してはならないと思つたのであつた。<sup>(3)</sup> こういう点からしても、海老名弾正の朝鮮伝道論は彼の思想を照らす一種の鏡のような気がしてならない。その意味で彼の朝鮮伝道論を彼の思想全体から眺めるとともに、朝鮮伝道からはね返ってくる光に照らして彼の思想を検討し直すことが必要である。彼の思想が朝鮮また朝鮮伝道という周縁のことから眺められ、それが彼の思想とキリスト者としての生き方の本流に戻されて問題にされるべきだと思ふのである。

これは海老名弾正一人のキリスト者についてのみいえるのではあるまい。日本の教会史全体、日本史全体についても同様にいえることである。その意味では海老名の思想とその枠の中における彼の朝鮮伝道論に対して検討を試みることは、十分象徴的な意義を持ちうるのではなからうか。

## 注

- (1) 松尾尊允「日本組合基督教会の朝鮮伝道―日本プロテスタントと朝鮮―」(『思想』五二九号、一九六八年七月号)一六、一七頁。
- (2) 上掲論文一三頁以下参照。
- (3) M・ド・セルトー、山口昌男「歴史学の新しいパラダイム」(『世界』一九七七年三月号)参照。

## 海老名弾正のキリスト教理解

熊野義孝は海老名の思想を「思想の神学」と名づけた。それは海老名を神学者であると見るよりは宗教思想家と見たからであつた。<sup>(1)</sup> 海老名はキリスト教をドグマの面から眺めるよりは、文明論的に、歴史的に捉えようとした。これが彼のいわゆる自由神学の内容をなすのであつた。神とキリスト者の関係が一次的であるよりは、神と世界、人類との関係が一次的であつた。小崎弘道は海老名の「新神学の福音は如何なるものか」と問うて、つぎのような簡潔な説明を与えた。<sup>(2)</sup>

「第一は神は吾人人類の父たる事、等二は吾人人類は神と其性を同じうするもの、すなわち神の子たる事である。第三はキリストは吾人人類に此二大真理を示し給うのみならず、如何に吾人人類が神に仕うべきか、彼自身の言行をもつて父子親あるの孝道を如何に尽すべきかを教え給うたのである」

小崎はこのような理由で海老名においては原罪と贖罪の問題が無視され、救済よりは修養に傾き「道德教」となつてしまつたと評価した。このような海老名の思想を一言で表現するならば、「ブルジョア精神の無意識的な道德的また宗教的自己満足」がキリスト教的神話を否認するに至つたといえるであろう。<sup>(3)</sup>

熊野は海老名がこのような「いわゆる新神学的傾倒」を現わすように

なった理由を「輸入神学への単純な迎合」か、「学修時代の外国宣教師たちに見られた固陋な神学思想への反撥」か、「海老名その人の天性による思想の特質」かと問うた。そして第二、第三が「彼の思想形成に重要な動機を与え」それは彼の「生一本の伝道的熱情につらぬかれたものに違いない」と見ている。<sup>(4)</sup>

海老名は明治二十年(一八八七年)に熊本教会に赴任してから、日本神道の研究を深めた。この努力は、明治三十年(一八九七年)神戸教会を去って東上するまで続いたという。<sup>(5)</sup>この明治二〇年代において、海老名は自由神学を背景にして、日本神道を研究、彼の思想的立場を固めて行ったといっているであろう。この時期は彼が伝道者として日本の厳しい現実の中で模索していた時分であった。徳富蘆花は海老名の熊本における伝道について、国権党から憎まれ「説教最中にソレ敵襲と聞くより耶蘇を信ずる健児等はばらばらと立って街に跳り出で応戦したものです」と書いている。<sup>(6)</sup>このような状況において海老名は神道の研究は護教的立場、宣教的立場から切実なものであると思つたであろう。

その結果は「日本国民は古来敬神の国民である」が、儒教は倫理的な面から「日本在来の神道」を補つたのであり、キリスト教は宗教として「この敬神の道を徹底的に遂行するもの」というのであった。そこで「本居平田の二先生」はキリスト教に対してユダヤの予言者またはギリシヤの哲学者のような役割を果たした人々である。キリスト教はこの二人の

大改革を徹底して、「天地万有の造物者たる独一神を絶対者として尊崇し、本居平田の二先生より百尺竿頭に一步を進め八百万神を排除した」と論断したのであった。<sup>(7)</sup>

海老名におけるこのような傾向は神道または土着思想との混淆を意味するのではなく、徹底した護教論であった。そのために、彼は「昔時は皇族の神孫にして、人間の種ならざるを尊しと心得、遙に皇族を神視して仰ぎたれども、是れは明治の時代に於ては不可能の事となった」とい切った。「科学的教育」と「世界の新運」がそれを迷信として排斥して顧みないからであるといふのであった。<sup>(8)</sup>そして海老名は「神社崇敬」という明治政府の内務省、文部省が打ち出した方針に疑問を投じ、「神殿に於ける靈魂鎮在の信念は今日より之を見れば、則ち迷信である」と主張した。そして未来に向つて「国家は宜しく世界的宗教を尊重せねばならぬ」といふのであった。<sup>(10)</sup>

このような護教論からすれば、人類の歴史は発展的に捉えられなければならない。海老名は「支那人など」は人類の歴史を光明界から漸次暗黒界に転落するように見た傾向があるが、それは「旧式の人類史観」であつて、「新式の人類史観」によれば「人類は野蛮より進歩し来つて、段々文明に赴きつつある」ものであり、「子孫は祖先に優るもの」であると考へた。そのために彼は過去の日本の歴史を回想すると今は「三十歳を超え、四十歳にも近き練達の士がその十歳内外の時代を顧るが如き

ものにて、背上冷汗を催さざるを得ない」というのであった。ここで彼は祖先崇拜よりは子孫崇拜をはかるべきであると、啓蒙期の歴史観を徹底させた。<sup>(11)</sup>

それでは発展して行く歴史はどちらの方向に向いているのであろうか。それは「家族本位主義」「国民本位主義」「民族本位主義」「人種本位主義」を超えて「人類本位主義」に向うのであって「敵愾心」を超越して「博愛」に向う。これは「農産」の時代から「世界人類の便利に供する物品を製造する」商工業時代の列国が要請する生き方であった。

しかして「列国を以て一大家族と見做す思想は専ら基督教の行はるる国民の間」において意識されるものである。そのために神道は民族的宗教としてユダヤ教のようにキリスト教の「一部と見れば足る」と考えるべきである。こうして海老名は「列国の大家族を作る要素」としてつぎのような七カ条をあげるに至った。

- 1、列国民の思想感情を遺憾なく発表し得る共通言語の広く行はるること。
- 2、外国語の研究を盛にすること。
- 3、翻訳書を増加すること。
- 4、列国経済上に於ける利益の分配。
- 5、雑婚の広く行はるること。
- 6、普通教育を盛にする事。

## 7、宗教道德の普及を計ること。

海老名はこのようにしてより完全な社会へと進むことに対して少しも疑わなかった。彼は「仮令激烈なる衝突を肯てする事あらんも、吾人は断じて悲観しないのである。蓋し神の国の発展はこの衝突の間にその歩武を進むるも知れぬ」と断言してはばからなかった。<sup>(12)</sup> いわば海老名にとっては、近代ブルジョア社会が進む方向はキリスト教的「神の国」の実現であり、神の計画はどのように進歩する世界に内在していた。

海老名のこのような思想は自由主義と呼ばれ、しばしば歴史主義またはヘーゲリアン的であるともいわれた。<sup>(13)</sup> いずれにせよ彼は正統派キリスト教の立場に立つことはできなかった。それをもっとも克明に現わしたのが、一九〇一年に始まった植村正久との間の「キリスト論論争」であった。海老名は一九〇二年『新人』誌上に「三位一体の教義と予が宗教意識」という論文を発表した。

ここにおいて彼は「猶太教は独一神を認むると同時に多数の天使をも認め、異教は八百万神を認むると同時に無窮永遠の存在を認めた」と主張して「超絶神と万有神と即ち猶太教と異教とを結付くる力」は「神の分身にして天地の中に遍在する所のロゴス」<sup>(14)</sup>であると明言した。ここに於いて彼が長い間模索してきた日本人の「史的神明の信仰」「日本人の宗教信仰中にある一神的傾向」<sup>(15)</sup>が、神学的にキリスト教と結びつけられた。しかして「基督はロゴス啓示の絶頂」である。海老名は「天地の

神」はわが「君主」であると思ひ、その「臣僕」であると「感得」していたが、神がわが「父」であり、自分はその「愛子」であるという意識に至った。そこで「天地の主なる父よと号呼し給ふた耶蘇基督の宗教的意識に限りなきの同情と同感とを献すること」ができ「基督が凡て我父の聖旨を行ふものは是れ我兄弟なり姉妹なり母なりといひ給ふた心情」も推知できるようになった。ここで海老名は「父子有親の境涯」にあった罪なきイエスは信じうるが、キリストを「ロゴスの化身である」というのは受け入れられないとのべた。そして彼は大胆にも「基督の宗教」と「基督を宗として建立したる宗教」があるが、キリスト者は後者を脱して前者に服すべきであるというのであった。人間はみなキリストと同じように神の「愛子」であり、ロゴスを同じく分有していると思うからであった。ここに伝統的教義、キリストによる救いと贖いは脱落したといわざるをえなかつた。<sup>(16)</sup>

海老名は日本の歴史とキリスト教の関係をヨーロッパのそれと対比して考えようとした。キリスト教がヨーロッパを支配したように、いづれは日本を支配するだろうと思つた。そのためにもローマにおいて広く知られていたロゴスとイエスを結び付けることで「ロマ天下の思想界を併呑した偉大の思想」としてロゴス論を捉えた。<sup>(17)</sup> そのために海老名のキリスト教理解はキリスト教が日本化できずに排斥されてしまうか、または「双方の性格に於て同化する結合点」を見い出して日本国民を教化でき

るかといふのにあつた。彼はこのような宣教的観点からキリスト教を理解しようとした。そしてあえて天皇とローマ法王という地上における二人の主権者の間で権威の衝突があれば「日本人としては無論天皇の命令に服従すべきことである」といい切つた。そして聖書の中にキリストを「全く地上の主君として歌うたる所」があるが、そのようなキリスト教は「日本の国体」と衝突する。「故に皇国に於ての基督教はその政治的キリスト観を去つて、全くロゴス哲学のキリスト観とならねばならぬ」と考へた。黙示録のキリスト観よりはヨハネによる福音書のキリスト観を取るべきであるといふのであつた。<sup>(18)</sup> 神の主権、神の歴史支配、キリストの王権を取り除いた形而上学的キリスト理解に立つべきである。地上の國家的主権と衝突してはキリスト教の伝道と教化が不可能であるから、「日本化」を求め、キリスト教と日本の国体との双方が「同化する結合点」を見い出さねばならないといふのであつた。海老名のキリスト教理解は、こうして日本的宣教論の立場に立っているもので、創造主、歴史の支配者であり裁き主である神への信仰告白に立っているものではなかつたといえよう。

確かに海老名のキリスト教思想は近代主義的リベラルな思想であつた。以上において彼の思想について断片的に調べて見ただけでも、その近代主義的キリスト教思想が担っているいくつの特徴を確認することができが、ここでは三つの特徴をあげてもう少し検討して見ることにしたい。

第一にあげられるべきことは、人間の深層を理解せずに人間性に対して実に楽観的であったということである。海老名は「聖霊」とは何かと問うて、それは広い意味における「理性の大部分である」ことは疑いがないと答えている。そしてこの理性は「形而下の事物」を知りうる「智能」だけではなく「神を識る智能」「至善を認め得る智能」のような「道義的又宗教的」な智能をも意味するという。そこで「聖霊は或る意味にていへば、クリスチャン理性」と名づけてもいい。そしてカトリック時代の第一期と今までのプロテスタント教会五十年の第二期を経て、第三期に入った日本のキリスト教はこの聖霊即ち「クリスチャン理性」の上に立つべきであるといふのである。<sup>19</sup> 彼におけるロゴス論も実はこのような自我に対する楽観的な承認の上に成立したものであった。彼によれば「神は人類の中に現存し給ふて人性の至聖至善なる所は即ち吾人が神と尊崇するものと類を同ふするもの」であって「真人は即ち神像」であった。<sup>20</sup> いわばこれが彼の人格論である。「人格の価値は此宇宙唯独りという個性を備えて、同時に無限の神の性格を有し、我法即ち宇宙の法、我道即ち宇宙の道と自覚し、又單純にして又複雑なる自治自適自由自在なる靈そのものに存する」といふ。<sup>21</sup> こうしてこのような真人が神に触れることが宗教であるといえるわけである。

人間に対するこのような見解は近代的ブルジョアジーの浅はかな人間観からくるものであり、ややもすれば彼らの道德的自己満足を促すもの

である。そのような見解は当然、進歩主義的、楽観的な歴史観と結合する。これが近代主義的キリスト教思想の第二の特徴である。正統派キリスト教が罪は無知のような不完全性として見られ、間もなく教育によってそれは克服されるのだと考える。このためにキリスト教教育は世間的な文化教育と別に異ならないものになる。<sup>22</sup> こうして人類の歴史はこのような無知を克服し、博愛の心を向上させ、善良な国際機関を持つて協力することによって無限なる発展をなしうるものだと考える。

海老名は一九〇四年八月、日露戦争の最中に「戦争の美」という説教を行なった。戦争のような「悲惨なる苦闘」を経なければ「国民の大人格」は造り出されない。そこで「今や我國民は此戦争によって、実は美しい、清い、尊い人格、白雪を戴いて碧空に聳ゆる富士の姿よりも尚美しい人格」を造り出そうとしていると「戦争の美」を讃えた。後日海老名は満州を訪ねた時（一九一五年）「國民發展の理想」という講演の中で日露戦争で満州に向う兵士たちに対して「帝國のために死んで下さい」「墳墓の地が満州にできると云ふことは、これは実に此帝國の後世子孫のために貴いことである」「此満州に行つて死ぬと云ふことは貴方がたの光榮、貴方がたの光榮は、帝國の光榮となる」と語った。彼は植民の歴史は「大河の山から流れて来るやうに」戻ることのない歴史であると思つた。その植民は文明を運んで行くことであつて、誰も「文明に反抗することはできない……反抗するほうが間違つている」と彼は考え

て疑わなかった。<sup>(23)</sup>

このような歴史に対する楽観論はブルジョア文明と帝国主義的世界秩序を打ち建てようとする階層にとっては、当然のことと考えられた。自分たちの利益が人類の利益であり、ブルジョアシーの追求する歴史の方向は人類史の方向であると思つたのであつた。そのためにそのようなブルジョア秩序の確立と維持を求める戦争などは、人類の歴史の中にある旧い悪を取り除く歴史的活動に過ぎなかつた。海老名にとっては日露戦争は「列国の大家族主義」が実現するための道程であつた。日本が勝利することによって、「列国の大家族主義」は白人世界のみではなく、「広く世界に行はるべき運命」を指し示すようになった。それだから戦争が終ると直ちに「日英同盟(第二回)」が結ばれたというのではないかといふのであつた。「列国の大家族主義」といふ、実は帝国主義の拡大を、彼は世界を一つにし、文明と博愛が支配する地上における「神の国」を実現する道であると考へたのであつた。<sup>(24)</sup>

海老名の世界史に対するこのような楽観論は尽きる所を知らなかつた。第一次世界大戦に対する彼の見解はつぎのようなものであつた。<sup>(25)</sup>

「神の宇宙経綸の大業は何時も同所に停らず、又同事を繰返さず、常に變々乎として變化し、進歩發展しつつかあるのであるが、然も時あつてか震天動地の大事件を以て人類驚倒の間に、世界の面目を一新せしむることがある。今日までの基督教は、其特種の方面即ち各国民の独

特性を發揮するに大なる貢獻をなした。然るに此戦乱は基督教本来の理想なる万国主義的共通普遍の思想を喚發する一大エポクにして、之を起点として基督教が大なる転向をなすは識者の信じて疑はざる所である」

平時においては考へられなかつた「一大進歩」をとげて「万古未開の新時代」が開かれるのであるから、最後に「時は盈てり神の国は近づけり。汝等悔い改めて福音を信ぜよ」と訴えざるをえないのであつた。この戦争によって日本は「万国協力主義」「人類同胞主義」のキリスト教道徳へと發展することを海老名は期待した。そして国際連盟が出現すると「熱狂して」これを迎え入れたといふ。<sup>(26)</sup>それはヨーロッパの近代主義リベラリストたちが、第一次世界大戦によって、今度こそは人間の因襲的な愚昧なる悪が取り去られ、国際連盟や国際貿易によって人類の最終的な理想を実現しうるだろうと思つたのと變ることがなかつた。<sup>(27)</sup>

このような楽観的歴史観においては、歴史の進展は即文明の發展であり、またキリスト教の勝利と支配を意味した。このような「神の国」の思想が、近代主義的キリスト教思想の第三の特徴であるといつていいであろう。こういう考へ方は、海老名においても一貫した姿勢であつた。そのような楽観論において彼は明治の近代化とキリスト教伝道の未来とを一致させ、それでいけば開化運動のキリスト者でありえたであろう。そのキリスト教が担う使命はいわば「天下国家の救い」や「神の国」の実



現にあった。<sup>(28)</sup>海老名は『国民道德と基督教』の序文において「基督教は帝国の宗教たらざるべからず、又宗教たる、運命を有すると思ふ」といい切っている。彼の「神の国」は全く超越性を持たない終末論を欠いた近代主義的なものであった。

実際海老名は歴史内救済論の立場を取った。超自然的な終末は「謬見」であった。イエスは「世界の廃滅と社会の壊乱」を期待したのではなく、「此自然界に神の国が来ると信じ、社会の罪惡と戦ひ、人心の改善に全力をそそいだ」と考えた。このような歴史内救済の終末論については彼はローマ帝国を教化し、帝国の中に「靈的帝国を建設」しようとしたキリスト者たちの例をあげた。そして「内觀の王国」は「必ず人類社会に実現し来るべきもの」だとして「唯その実現し来る道は漸を追うて来るべきものにて、遽に天上より來臨すべきものではない。この王国の實現にもその實現の理法があるのである。奇跡的にあらず、合理的でなければならぬ」とまでいった。<sup>(29)</sup>ここにおいて歴史に対する理性の時代、啓蒙開化のリベリズムを代表する海老名の樂觀論は絶頂に達したといつていいであろう。これが日本史と日本の帝国主義的膨張を眺める彼の基本的な態度であった。

海老名が神戸教会を去って東京に移り本郷教会の再建に乗り出したのは、一八九七年であった。間もなく日露戦争を迎えて彼は大活躍をした。この教会は人員の面からいえば東都第一の教会にまでなった。海老

名が日露戦争を賛美したために大杉栄のような人は失望して本郷教会を去ったが、<sup>(30)</sup>教会は依然として盛況を呈した。この理由の一端は少なくとも近代的リベリズムとナショナリズムとキリスト教が調和をなして共存していた海老名の思想に多くの人々が引かれたことにあるであろう。

ナショナリズムが高揚した時代においては、キリスト教によって民族的アイデンティティが決して失なわれないという表示が要請されるものである。そのことはいわば開化主義者に共通した課題であり悩みであった。しかし固陋なナショナリズムに捉われていないというリベラルな姿勢も要請されたわけである。そのような点において多分海老名はその当時、もっとも典型的な人物に見えたかも知れない。病床にあった綱島梁川が海老名に宛てた、手紙<sup>(31)</sup>(一八九九年五月二二日付)にあるつぎのような一節は、以上のような本郷教会の性格を語ってくれるのではなからうか。

「基督教界の近況は如何に候や、小生は今の時を以て基督教の一転歩の秋と存候。どうしても一度は基督教を(勿論其フォームを)めっちゃめっちゃに粉齏して日本的意識の根柢に其精神を植え更へざるべからずと存候。かくして此意識の深根柢より新に生長し來たる基督教こそ strict sense にての日本基督教と存候。我等は所謂日本主義に与みする能はず候へども、彼等よりも或意味に於て一層深き且博大なる日本主義を唱ふるの要あるを見申候。此点に於て小生は根本的に先生の主張

に賛成致者に御座候。誰れか日本のルーテルたるものぞ、日本的基督教の大義を唱道して一の *dead formula* と化しつつある今の宗教を改造するものは誰れぞ、我等は先生が屢々馬を陣頭に立てて名乗り玉へるを聴き候。嗚呼先生よ願くは我が宗教の爲めに自重せよ。願くは我宗教家をして文学、美術、社会、道德の諸方面より深く我故国を自識し故国を重じ故国に同情せしむるの一念に燃えしめんことを。此自識なく此同情にインスパイアせらるるなくんば日本的基督教は一の空名に了らんと存候。而して小生は我が故国の神聖なる歴史をも *dispiise* するが如き口吻にて説教する浅薄なる牧師に遭遇するを悲しまずんばあらず候」

実にナシヨナリスティックなキリスト教といわざるをえない。海老名の思想はヨーロッパのブルジョア社会の近代主義的リベラリズムを日本の風土に植えて、日本における近代資本主義や帝国主義と両立しうる、またそれを支えうるキリスト教を目ざしたものと見えよう。そのために「帝国の宗教」にならざるをえないしその運命にあると思つたキリスト教は先進「列国」における一種の「市民宗教」<sup>32)</sup>を意味したのであろう。「帝国の宗教」はヨーロッパにおいてキリスト教がヨーロッパの伝統とその当時のブルジョア社会に結ばれていたように、日本においても日本の伝統と資本主義的体制とその発展に結ばれているいわば日本の「市民宗教」であることを海老名は願つたのであろう。そしてヨーロッパのキ

リスト教はヨーロッパの国々においてその利害の衝突にもかかわらず「列国の大家族主義」を支えていると思つた。国力を伸長すれば日本もこのような世界秩序に参加するというのが、海老名の基本的発想であつた。それが「日本化と基督教化」はその根底において一つであり、その発展においても一つであるということであつた。彼はその過程をつぎのよう

に説明した。

「基督教の精髓は先づ国民の精髓と婚姻して、一身同体となり、その所謂基督教なるものは全然日本国民に併呑されたるの觀を呈せねばならぬ。しかして国民の根底よりその新なる神的生命を発せしめ、その従来の狹隘なる民族主義を脱却して、人類主義を旨とするに至らしむる、則ち吾人の所謂基督教化である」<sup>33)</sup>

それでは日本の超国家主義に遭遇した時、このようなキリスト教は一体どのような運命をたどるだらうかと問わねばなるまい。資本主義のリベラルな文明が、その行きづまりの中でファシズムの道を取り、日本の場合は日本化即キリスト教化が全く一つの幻想として碎かれてしまう時に、それはどのような道を行くのであろうか。それでも海老名の進歩史観、文明化即キリスト化という発想に支えられたキリスト教理解は生き長らえることができるであらうか。それは歴史的事実ではなく虚構の上

に立てられた幻想的な思想ではなかつたか。

またそれに先立って日本化即キリスト化そして日本の帝国主義的膨張

即列国の大家族主義の進展であり、神の国の実現であるときえ思った海老名のキリスト教理解が、彼の朝鮮伝道論におけるメッセージであったとすれば、その行方はどうなるであろうか。そのような支配者側の樂觀論、ブルジョア社会の自己満足的歴史認識を、植民地支配を受けている民族が受け入れることができたであろうか。支配する側と支配される側には、異なった歴史認識が成立したのではなかったか。その時海老名におけるような歴史認識は、どのような虚構を設定して樂觀的進歩思想を編み出したのであろうか。これがつぎの章において問題にされねばならない課題である。

## 注

- (1) 熊野義孝『日本キリスト教神学思想史』新教出版社、一九六八年、一四五頁以下参照。
- (2) 同右、二一〇—二一一頁。
- (3) Reinhold Niebuhr, *An Interpretation of Christian Ethics* (New York, 1979), pp. 8—9.
- (4) 熊野義孝、前掲書一七四—一七五頁。
- (5) 岩井文男『海老名弾正』教団出版局、一九七三年、二一〇頁。
- (6) 渡瀬常吉『海老名弾正先生』龍吟社、一九三八年、一八三頁。
- (7) 海老名弾正『日本国民と基督教』北文社、一九三三年、四頁以下参照。
- (8) 海老名弾正『国民道德と基督教』北文社、一九二二年、三三頁。
- (9) 同右、三九頁。
- (10) 同右、二六頁。

海老名弾正の思想と朝鮮伝道論

- (11) 同右、四四頁、三〇頁。
- (12) 同右、六五頁以下、七七頁以下、九三頁、一〇二頁、九八頁。
- (13) 岩井文男、前掲書一八九頁。
- (14) 『海老名氏の基督論及び諸家の批評文、基督論集』警醒社書店、一九〇二年、二八頁。
- (15) 『国民道德と基督教』七一頁。渡瀬常吉、前掲書三五—一頁。
- (16) 『基督論集』三三頁、三九—四一頁、五〇頁。湯浅与三は『我國に於ける三大基督教思想家』（警醒社書店、一九四二年、四四頁以下）において海老名弾正がその一九一八年の著作、『基督教新論』（警醒社書店）で「之れを要するに、三位一体の教義は一種の形式ではない、父と子と聖霊とは之れ実に生命あるクリスチャンの実験である云々」（一九〇頁以下）と書いているのに注目した。そして海老名氏は「自身の意見に変化がないと云って居るのであるが、それは変化でなく進化和云ふべきであらう」とのべた。
- (17) 『基督論集』三三頁。
- (18) 『国民道德と基督教』七〇—七一頁。
- (19) 同右、一五二頁以下参照。
- (20) 『基督論集』四二頁。
- (21) 『日本国民と基督教』一七七頁。
- (22) Reinhold Niebuhr, *op. cit.*, p. 9.
- (23) 渡瀬常吉、前掲書三七七頁、三八一頁、三八四頁。
- (24) 『国民道德と基督教』九五頁以下参照。
- (25) 渡瀬常吉、前掲書三九二頁。
- (26) 同右、三九五—三九六頁、四〇八頁。
- (27) Reinhold Niebuhr, *op. cit.*, p. 6.
- (28) 渡瀬常吉、前掲書四九九頁、四七八頁。
- (29) 海老名弾正『基督教新論』警醒社書店、一九一八年、四〇九頁、四一四頁。

四一九頁。

(30) 土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』新教出版社、一九八〇年、二〇八―二〇八頁。

(31) 渡瀬常吉、前掲書三一六―三一七頁。

(32) R・N・ベラー、河合秀和訳『社会変革と宗教倫理』未来社、一九七三年、三四三頁以下参照。

(33) 『国民道徳と基督教』七四―七五頁。

### 海老名弾正の朝鮮伝道論

日本組合基督教会においても朝鮮伝道が論議され出したのは、日清戦争当時であった。『基督教新聞』は一八九四年九月二八日付の新聞に「東洋伝道と日本の基督教」という社説を掲げた。「日本教徒が東洋開進の大事業に於て其一大要素たるの責任を負へることを今日に覚悟せざるべからず」というのであった。この朝鮮伝道を論ずる最初の社説においても、キリストを知らない人々に救いの福音を伝えるという単純な伝道論よりは「朝鮮独立の事業は吾が国民が任じて当らざるべからざる所、精神上に於て此に尽さんとするもの、我が諸教会之に任せずして誰を待たんとする」という政治的意図を示したものであり、ひいては朝鮮を思うこと切であるのは「何となれば吾国は世界に公言して朝鮮を独立せしむべしと誓ひ、以て其大責任を負ふの覚悟をなしたればなり」と主張したのであった。政治的にはこの時分は朝鮮の独立を支援するために

日本は朝鮮の内政に干渉し、軍事行動を取るといつていた時であった。組合教会の朝鮮伝道論議はその後いったん下火になるが、一九〇三、四年、日露戦争前後から再び活発に展開される。このことは『基督教世界』においても『新人』においても同じことであるが、まず『基督教世界』を通して組合教会の全体的な動きを追って見ることにする。

組合教会は一九〇三年、総会において朝鮮伝道を決議してから宮川経輝を送って伝道に対する準備視察をさせた。その時はおもに京城（ソウル）と仁川に在在する約一万人の日本人に対する伝道を目標にして、そのためには一人の伝道者がいれば十分であろうと考えた（『基督教世界』明治36・12・10）。そこで翌年、剣持省吾牧師が渡韓することになった。その時は朝鮮人への伝道も「我日本民族の肩にあり」と思いつながらも、移民の必要を強調する立場からまず日本人移民の「啓導」を目標にした（『基督教世界』明治37・5・19）。剣持省吾はその報告において直ちに日韓保護条約が強要される前後における朝鮮のキリスト教と政治についてつぎのような報告を寄せている。

「殊に漢域基督教青年会なるものは会員の数四千を超ゆ。此等青年会なるものが過日数月前より政治問題に関係し始め韓国独立問題其他凡ゆる排日運動の為に盲動し大に識者の指弾を受けつつあるは悲しむべき事なり。……四千有余の会員中其半数は未信者にして所謂雜輩と称する仲間なれば日韓条約締結後の今日猶所々に青年会員と称して街頭

演説などなし愚民の煽動に狂奔するもの少なからず基督教会の迷惑察すべきなり」(『基督教世界』明治38・12・14)

劍持の報告にあるこの一節だけからも組合教会の朝鮮伝道の将来を推し測ることが難しくないかも知れない。彼が使命というのは「韓国二千万の民をして真文明の光沢に沐浴せしむべき」ことであるが、それに疑いをはさむことは「誤解猜疑驕傲」であり、日本の侵略に抵抗する者は「雜輩」であり「愚民」を扇動して教会に災を及ぼす者であるというのであった。

このような状況の中で早くも柏木義圓は「韓国伝道」の真にあるべき姿を提示して批判を展開している(『基督教世界』明治37・8・11)。

日本は「韓国独立扶植」「領土保全論」を唱えていたが、いつしか「保護国論」「日韓合同論」となり「長森荒蕪地拓開案」「塩専売権」「煙草専売権」「仁川埋立工事」「水田売収計画」などと利権をとりあげているのではないか。しかも日本人は地方では「郡司を引摺り出し之を打撃する」という「暴横」をなしている。そして柏木は「吾人日本人は韓国の為めと称して既に二大戦争を起し彼の国土を悲惨なる戦場と為し絶大な疾苦と迷惑とを彼国人に与えたり。しかし彼国に縦横する日本人概ね皆日本国家の利益、若しくは彼等個人各自の利益を先づ第一とすることに非ずや」と政治的現実を指摘した。そしてエジプトにおいてイギリス人の「失行」を嘆いて「願くば皇天我國民の罪を問わず上帝の怒偏に

基督に隠る、余一人の上に落ちんことを」と祈った「ゴルドン將軍」の例をあげてつぎのように結んだ。

「天を畏るるの我國民は亦此心なかる可らず。而して我国よりの韓国伝道は此心の発現ならざるべからず。方今韓国伝道は全く我国の利益を離れ純粹に韓人の為にする唯一の事業ならざる可らず。此れ韓国扶植を声言して大戦を起したる純正なる我國民の韓国の為に必ず為さざる可らざるの責任なるなり。嗚乎累代の悪歴史と悪境遇とに由々其品性を毀損し了られたる現今の韓人は哀れなるかな日本よりにあらず欧州よりにあらず真に天より遣はされたる福音の使者のみ独此民の特頼なり。吾人日本人より此使者を送らざる可らず。吾人之が為に祈り之が為に献金せざる可らざるなり」

柏木は日本人の罪責をせおい、朝鮮人の苦難に参加する「福音の使者のみ」による伝道を訴えた。それに耳に傾けたように『基督教世界』の社説においても、アンテオケ教会の例をあげて、海外伝道をその教会の力が弱い時から始めなければならぬと強調しながら「為にする所ある方便的伝道は曾に彼國民を誤るのみならず、又実は我が信徒たる面目を傷くるものと云ふべし」といってパウロがなしたような真の伝道を強調しているのを見ることが出来る(明治38・6・22)。

柏木とは実に対照的に、これから組合教会の朝鮮伝道をその一手に握って進める渡瀬常吉の「韓国伝道論」も『基督教世界』明治(40・8・15)に

現われ始めた。先にあげた柏木の見解は、その後の彼の朝鮮伝道論を支配し、渡瀬の朝鮮伝道を批判して譲らなかつたものであるが、渡瀬がその初期の『韓国伝道論』で展開した考えも終始変らぬものとして柏木との論戦に臨んでもくり広げられたものであった。渡瀬は、一九〇七年、ハーグ密使事件が起つたために第三次日韓協定が成立し、韓国は日本人を韓国政府官吏に任命せざるをえなくなつたことによつて、目ざましい発展を予想しようになつたといふのであつた。そこで朝鮮伝道は政治家や軍人による「威服の状態」を「悦服の状態」にするといふ、「政事家軍人」のできない「人心懐柔の道、溫柔慰撫の道」として必要であると主張した。「韓国は日本の物になる」であろうが、「人心の離反」を招いてはならない。朝鮮では列強の植民地支配に比べれば「荒療治」も大したことはなかつた。日本が支配するからには日本人による伝道によつて「日韓同化」をはからねばならないと渡瀬は続けた。これが韓国で如何なる悲惨なことが起ろうと、一九一九年の三・一独立運動のような大事態が起つても、組合教会の朝鮮伝道が朝鮮から撤収するまで、彼が主張し続けたものであつた。このような渡瀬個人の信仰のあり方が、組合教会の朝鮮伝道全体に強く影響して、それを不幸な結果に導いたともいえるほどであつた。それでは彼の師として彼の朝鮮伝道を強く支えた海老名弾正の朝鮮認識とその伝道論はどうであつたかを検討しなければならぬ。まず一九一〇年、彼の第一回朝鮮伝道旅行のことを取りあげて

見よう。

一九一〇年、日韓併合を四カ月前にひかえて組合教会は京城(ソウル)と平壤で「拡張伝道」を行つた。海老名弾正は四月三日、ソウルの鍾路、キリスト教青年会館で朝鮮人会衆に向つて演説をし、一千の聴衆を深く感動させた。同行した渡瀬は海老名は「神の国」といふ題目で「世界の大勢より日韓の關係に及び、両国基督教の使命に論及して」つぎのようにのべたと書き記している。<sup>(1)</sup>

「韓国に来る日本人は益々多くなり、韓国の人にして日本に行かざる人も多くなりまして、日本にも亦諸君の住む処は多いのであります。而して若し夫れ日韓両国民の間に意思の疎通を欠ぎ、利害相一致せざる如き事あらば、之を融合し、之を清くし、之を親密ならしむるものは真に是れキリストの精神、キリストの魂であつて、両国の基督者は両民族の血となり、光となり、塩とならねばなりません。諸君よく知り給へ、此クリスチャンの使命は実に重大なるものであります。今日日本に於てもクリスチャンは年を追うて増加して参ります。韓国に於ても非常なる勢を以つて増加しつつある事実を聞いて、私は衷心喜びに堪へません。之れは正しく日韓両国の間に神の国が建設されつつあるのであります。……日韓両民族は基督の名の下に結ばねばなりません。……キリストは此の神の国の建設について大事な言葉を残し給ひました。即ち柔和なる者は福なり、其人は地を嗣ぐことを得

べければなり……吾人の武器は只此の一の柔和であります。……諸君よどうぞ基督によりて其人格を高めて下さい。諸君の榮辱、諸君の利害、諸君の苦樂、皆是れ日本のクリスチャンが共に荷ふべきものであります。若し夫れ十字架にからねばならぬ時が来るならば、日韓のクリスチャンは共にかかるべきものでありますまいか。吾人はキリストと共に泣き、共に悲しみ、共に憂ふ。而して基督の榮えは亦吾人の榮えである。之れ実に神が吾人に賜はりたる大なる光榮であることを忘れ給ふな……」

長い文章をここに引用したのは、この背景には海老名のあまりにも樂觀的な朝鮮觀、朝鮮伝道論または日韓併合論がすくっているからである。このような彼の演説に朝鮮人は今までとは異なった日本人を發見して感動したという。彼は韓国視察談の中で平壤である有望な青年韓人が「我等は天に於て一なり」というので「そればかりでない地に於ても一つなり」と答えると青年は「アーツと叫んで両手を拍って喜んだ」と報告した(『基督教世界』明治43・4・28)。しかし海老名の演説は歴史的現実においては反証された。そこに彼の挫折と朝鮮人の挫折があったといえよう。この時、海老名は在朝鮮日本人に対しても「人類同胞の大主義」を説き「韓人を愛するは諸君の尊貴なる我を發展し、進んで神と結ぶ所になり」と論じたという。またある人は海老名は「人生の暗黒面を見るに鈍くして、光明を見るに鋭敏」で朝鮮の「一木一草の中に、又無心の

少童の疾走の間に、輝く朝鮮の将来」「高遠なる神の国」を見た<sup>(2)</sup>と伝えている。ここに海老名の朝鮮觀や朝鮮伝道論の特異性があつたといつてもいいであろう。たとえ彼が他人が使用するのと同じことばを使うことがあつても、彼においてははしばしば異なった内実を意味した。ここに彼の思想の悲劇があつたといえるかも知れない。このことについてももう一步進めて具体的に検討して見よう。

『新人』は日露戦争頃から一九一九年の三・一獨立運動前後まで、歴大な紙面を朝鮮問題に割いている。それは海老名自身がこの問題に対していかに深い関心を持っていたかを示してくれるといえるであろう。その背後には海老名の歴史觀そして幻想に近い朝鮮民族觀があつたことを見逃してはなるまい。そのような意味で日露戦争の最中に『新人』に寄せられた「朝鮮民族の運命を觀じて日韓合同説を奨説す」という社説(明治37・7・1)は注目されねばならない。

一九〇四年八月には第一次日韓協定によって、日本は韓国政府に日本人顧問をおきその行政の実権を握った。そしてついに十一月には第二次日韓協定で外交権を奪い統監をおくことによって、朝鮮を日本の保護国にしてしまった。このような政治状況の中で、朝鮮がまた日本の保護国にもなる以前の段階において、海老名は「日韓合同説」を主張したのであつた。それは朝鮮は政治的、社会的混乱を思い、また地政学的な理由からしても、亡国の運命を避けることができないからというのであつた。

「韓国の如き、其撰ぶ所の大国に合同すること、決して国家の恥辱にはあらざるなり、純然たる独立国すら、合同するの機を見て他国と合同するは、決して恥辱にあらず、況んや韓国の如きは古来純手なる独立国の体面を有し居らざるに於てをや」

しかして海老名が「韓人として京城に於て之を公言せば」「頭首を刎ねらるべし」と思いながらも、このように「日韓合同」を唱えるのは「日韓民族は同一種の民族」であり「同一種族の民族が合同するは世界の常例」であるからであり、その未来が実に樂觀的であるからと語っていた。日本人は「平等主義」を重んずるので、この合同がなれば「二十年を出ずして其別」は忘れられ、「韓人も日本人」と同じ教育を受ければ、「二十年を出ずして世界を驚かすもの」となり、日本武士とともに「軍隊教育」を受ければ「実に三十年を待たずして世界第一等の強兵」となり、その時には「韓人にして帝国国会議員となり、日人と偕に国事に参与せんこと、之を想見するに」困難ではないと彼は考えた。そういう考えは、今は四十年前の日本における開国論のように、人々に売国奴のようにいわれるかも知れないが、「島国と合同して海陸の主権を掌握する大帝國」を造る「光榮と幸福」を担うようにと彼は朝鮮人に訴えたのであった。また日本人は餓死を免れるためにも満州や朝鮮に移民しなければならぬ。しかしそれは「滿韓を文明化し日本化する」ことでなければならぬ。民族を「同化」ということは「彼らのものを奪ふ」

ことではなく、「我れの最も貴重なるもの」を彼に与えることであり、それは即ち「日本魂」を彼に与えることである。ここに彼らを文明化し一新するために日本化、同化の「伝道的教育」が必要であるというのであった（『新人』明治37・8・1）。このような立場は、決して日本人の朝鮮支配を無条件支えることではなかった。それはつぎのように「朝鮮に対する罪惡」に抗議することを忘れなかった。

「吾人は東西の大勢より推し、日韓永遠の康福より觀て、合同を唱道し、同化を主張したり、而かも翻つて日本現政府と國民との朝鮮人に対する態度を思へば、実に痛恨、忼慨殆んど熱淚の迸るを禁じ難き者あるなり。……戰勝を誇り、武士道を誇る日本人たる者、復た何の面目あつてか人道の前に立たん……吾人は信義を愛し公道を喜ぶ日本人の爲めに、飽くまで同胞の罪惡を痛弾せざる可からず」（『新人』明治39・1・17）

こうした姿勢は「日韓合同」「列國の大家族主義」は歴史の方向、文明の方向であり、博愛の時代、神の國を実現する方向であると思ふことからきたのであった。そしてその歴史の動きを妨げ、それをおくらしてゐるのは、人間の暗愚な啓蒙されない心であると思ふのである。そのためこそ人間に対する教育と宗教が必要であり、教育と宗教がこのような歴史の方向に人心を啓導していかなければならないといふのである。海老名はその主張において、このような思考のパターンを繰返しながら



ら、その後の政治情勢に対応して行った。一九〇七年、ハーグ密使事件が起り、日本の圧力によって高宗が退位し、第三次日韓協定によって韓国は司法権を失い、軍隊を解散させられ、日本人次官政治の下におかれるようになった。しかし『新人』は「幾屈曲幾紛糾」があり「多少の騒擾惹起」はあっても、この協定の成立は「祝賀に堪えざる」ものであり、問題は「威服」ではなく「心服せしむる」という「韓国教化」と「武士道を誇る日本人」が「何事にも国民仁愛の正心を披瀝」するかどうかにかかっているというのであった。そこで一九〇九年安重根が伊藤博文を暗殺すると海老名は「わが伊藤公を殺した者は勇敢なる人である。……これを日本人に懐いて、利を得ようとする者に比すると雲泥の相違がある」と論評しながらも、それはかつて「鎖港攘夷」を叫んで開国論者たちの暗殺をはかったことと同じように進歩する歴史を阻もうとする反動、暗愚な利己的行為であると解釈した。<sup>3)</sup>

海老名の歴史観によれば、「今日に至って猶韓国の独立を云々するが如きは」養生相かなわなないことを知っていても回復するから安心しなさい」というようなことに思えた。そして未来は「韓人は帝国臣民なる凡ての権利を有するに至らんこと」「韓国は極東に一大帝国を形成する一大要素」になり「韓人の光栄はその祖先の未だ曾て夢想だもなし能はざりしもの」であり、それは「実に韓国の復活」であること確かであった。そのためには朝鮮人の「大悟徹底する所」がなければならぬが、日本

人も「断じて韓国を属邦視」してはならない。韓國人を「同胞視」できないとすれば、「日本人の一大恥辱」である。そして海老名は「韓国民族をして日本民族と同じく天津日継の天皇を謳歌」し「天佑はとこしへに帝國の上にゆたかにして限りなかる」べく「帝國勃興の使命は昭々として蔽ふべからず」と日本的な神の國を夢見たのであった（『新人』明治40・9・1）。こうして彼は「日韓合併」が決定されると、「吾人の宿望」が達したと謳歌し祝福したが、それは「独り日韓人の為に祝するのみならず、神國發展の為に祝せずんばならず」というのであった。韓人は「亡国民」という「浅薄なる感想」をいだくことなく「獨立特行の國民に復活すべき」であり「日本は従来の島國根性に死して新興國民の氣懐に復活すべき」である（『新人』明治43・9・1）。いわばこれが神の國に入るための精神的条件であったわけである。このためにキリスト教の役割は一層重要にならざるをえない。

海老名のブルジョア的、帝國主義的ユートピアニズムはその限界を知らなかったように見える。現実においてそれを裏切るような事象がいかにすさまじく起ってこようとも、彼はそこに神のサインを見ることはできなかった。帝國主義的支配の拡大を通して神の國が実現されて行くという幻想を拭い去ることができなかった。人間の原罪性が集團の中で強化されて行くことも、民族や民族的伝統の問題も、支配と抑圧の政治のこともほとんど眼中にないようであった。このようなことがらは、ただ

人間の暗愚性が啓蒙され、その本来の分有している「無限の神の性格」が「自治自適自由自在なる靈」として発動するようになれば、いわば教育と宗教によって、克服されうるものと考えた。彼はそのような考え自体が、彼の中にある原罪的なものに根ざしている発想であり、予言者的キリスト教からではなく、「われわれ自身の価値を打ち立て、守り、それを神聖なるものにしてくださる神」を信ずる「文化宗教」からきているという認識を持つことができなかった。<sup>(4)</sup>それは理性の時代においてその時代的狀況にあまりにもキリスト教を適合させようとした、リベラルなキリスト教の誤ちをそのまま担っているものであった。

日本による朝鮮の侵略が進行し始めた初期から、韓国のキリスト教は排日的であり、独立のために戦おうとする「不穏な勢力」であると見られた。海老名の立場からすれば、これは日本政府よりは彼自身こそ「狼狽」せざるをえない課題であった。キリスト教徒は文明化された人々であり、当然日本による文明化に心服すべき人々であるはずではないか。海老名は併合直後、『新人』の論説において(明治43・10・1)『朝鮮伝道』を論じ特異な見解をのべている。朝鮮のキリスト教徒が「一大問題」になっているのは「我同胞が久しく基督教を軽蔑し、又は敵視して其伝播を妨碍した」ためであり、「朝鮮のクリスチャンが外国人宣教師の教化にならずして、日本宣教師の教化によるものとせんか、三十万のクリスチャンは日韓人を融合するに於て最も有力なる要素といはざ

るべからず」と書き記した。そして朝鮮のクリスチャンは文明化されているのであるから、今の排日に走るような「無謀なる気概」は、日本人による朝鮮伝道によって「之を論じて我に同化せしめる」ことができるというのであった。彼には日本の官民が「その歩武を揃へて進むときは、韓半島」の「同化」のようなことは決して「難事」であるとは思われなかった。それは「敵愾心」を超えて行くことが、彼が信じた世界史の発展方向であるからであった。<sup>(5)</sup>この『朝鮮伝道』の論説においても朝鮮伝道、朝鮮における「教化事業」は教育家、政治家、実業家、宗教家を問わず「協心同力」すべき「国民的事業」であることを彼は強調した。それは歴史の進行の妨げになるものを、できるだけ早く効果的に除去することを意味したのであった。

組合教会は日韓併合直後、一九一〇年一〇月の総会で「新たに加えられた朝鮮同胞の教化」を決議し渡瀬常吉を送って、一一年六月から朝鮮伝道始めた。<sup>(6)</sup>そして「朝鮮伝道に関する宣言」(『基督教世界』明治44・6・22)も発表された。

海老名は一九一〇年十一月、併合直後、「朝鮮の基督教徒を歓迎するの辞」を『新人』に寄せた。それは日本において政治は薩長人に握られ、他の諸藩の出身者はその他の分野に進出して成功を収めたように朝鮮人も「精神界に於て勝利者」になることをすすめたものであった。「政治的野心を去って公明正大なる基督魂」を受けべきである。伝道

に「政治的野心」を「混入」することは「基督の罪人」であり「天罰を蒙らんこと」は鏡を見るように明らかである。日本と朝鮮のキリスト者は「東洋大帝国の忠良の臣民」であるとともに「神の国の忠臣」であるべきであると記した。

海老名は朝鮮の教会が僅か二五年の歴史で三十万の信徒を教え、日本の信徒数の三倍に達したことを喜んだ。そして「今後朝鮮は日本の基督教の根拠地となるかも知れぬ」とさえ思った。朝鮮人は日韓併合の政治では立ち後れたが、キリスト教においては「先取権」をかちうることも可能であろう。その面で「帝国の指導者たるべき面目を開かねばならぬ」と、ここでも薩長論を先例としてあげている。そしてキリスト教における「世界的大精神」に立つことを強調した。そのためには「現今韓國を救済するものは基督教山上の説教である」ともいった。それが「戦敗者のやうなれども靈に於て、戦勝者たるを得る」道であり、「活路なくして日本人の圧迫に由て窮迫し、乱を起さざるを得ざる境遇にある韓人をして、新に活路を見出さしめ、善良なる自主の国民、以て日本人の有力なる兄弟とならしむる、道であるというのであった(『新人』明治43・5・1)。日本の朝鮮伝道は支配者の政治に仕えても、朝鮮のキリスト教は非政治の「柔和」という屈服の道を選ぶべきであると説いたわけである。

海老名は朝鮮において「敵愾心を靈化して博愛となし、政治的野心を去って公明正大なる基督魂」を受けけるキリスト教が可能であると信じ、

組合教会の朝鮮伝道はそのために尽すべきであると考えた。日韓併合後に韓国において急にキリスト者数が減少する現象が現われたのは「政治的野心」「敵愾心」に欺かれた雑輩がいなくなったからであるとも考えた(『新人』明治43・11・1)。それが日韓併合による朝鮮総督府の弾圧によって、信仰の弱い者が教会を去り、信仰と愛国熱に強い人々のみが教会に居残ったためであったことを彼は知らなかっただろうか。また彼は日本では仏教から来る圧力が強く「欧米の科学的思想、殊に非基督教的科学及び文芸を好んで輸入した」ために、キリスト教は困難な道を歩いたが、朝鮮においてはそのような障害がなく、一方「儒教の倫理は基督教が栄えたと考えた。それに朝鮮人は圧迫の中で宣教師たちの「同情と慰め」に大きく影響された」と見た。

果してこのような認識が正しかったのであろうか。海老名が米国各地を巡回していた頃、一九一九年三月一日、天道教とキリスト教が大々的に参加した全国的な独立運動が起った。渡瀬常吉は『新人』(大正8・4・1)と『基督教世界』(大正8・4・10以降)に「朝鮮騷擾事件の真相と其善後策」を書いた。そして彼は「基督教の主なる牧師伝道師が、今回の事件に参加せるの一事は真に了解に苦しむ。若し朝鮮の独立の爲めには神に背くも基督の命を奉ぜざるも可なりとせんか」と問うた。三・一独立運動に参加することが、かえってキリストの命令に背く

ことであるというのである。そのような事態になったのは、まだ朝鮮キリスト教が基督教の真生命を握って「いないからであり、「其の神学の保守的にして頑迷なる其の訓練の形式的にして自由の精神に乏しき」「ユダヤ教徒たる」ためであり、いまだに「其の敵視するものの為に祝福を祈るだけの修養と信仰がない」からであると解釈した。そして「日本組合教会に属する一百の教会二万有余の信徒」は毅然としてこの「大騒擾」にまき込まれなかったことを喜んだ。こうして渡瀬は組合教会の内鮮一体を目ざす朝鮮教化がますます重要であると説き、柏木義田などはこれを反駁した。<sup>(9)</sup>

この頃になると『新人』には急に朝鮮統治や組合教会の朝鮮伝道を批判する論説が増えてくる。新人社同人による時評欄には「朝鮮教化問題」についてつぎのように書かれるようになった(大正9・1・1)。

「第一に考ふべきは、教化とはキリストの精神を伝へることである。これ以外の属性を猥りに附してはならぬ。所謂日鮮一致論の如き、純然なる世界的見地から割り出された議論ならまだしも、日鮮一致の名の下に、実は朝鮮に奴隸的服従を強いるものである。なぜならば、若し、真に朝鮮人に日本人の精神を伝へたならば、彼等が日本人の如く独立を尊ぶ国民となるのは当然である。だから日鮮一致論者の言ふ所は、朝鮮人をして一切の歴史を忘れしめ又彼等をして一切の現状の不平等に盲目ならしめようとするものである」

こうして吉野作造の一連の有名な「朝鮮統治策」批判が『新人』に登場してくるわけである。<sup>(10)</sup> 朝鮮や朝鮮伝道の問題に対する『新人』の論調をここまでたどってくると、海老名弾正の日韓関係に対する展望が、いかにもろく崩れ去ったかを『新人』がはっきりと示してくれるような気がしてならない。彼の「日韓合同説」という神国論は、実は全くの虚構の上に建てられた、理論であるよりは単なる幻想に過ぎなかった。その美しいことばは、彼の「列国の大家族主義」と同じように、帝国主義を見抜くことができずにかえってそれを隠蔽したイデオロギーであった。

ようやく翌年、一九二〇年十一月二五日付の『基督教世界』に海老名の『朝鮮問題の根本的解決』という講演のアウトラインが掲載されている。三・一独立運動に参加した多くの朝鮮人が、日本の新聞では「不逞鮮人」とされているが、獄中にいる人にあえば「地位を代へて考へて見て下さい」といっているのとては、日本人は心からの「同情」に欠けていたと彼は続けた。また「此地位に立って両者手を握って、互に泣かなくてはならぬ。私は信ずる。日鮮の併合は、強者が弱者を征服したのではない。真の精神の深い処に於て、両者一致せんがためである」「要するに朝鮮問題は日本に取りては試金石である。日本の前に置かれたる深酷なる試験である。之れをよく解決し得なければ、それは日本に取りては由々しき問題である。日本の文明の崩壊を意味するものと見ても、間違ひない」と訴えた。海老名はその時、すでに六五歳を数え、欧米旅

行を終えて同志社総長に就任して間もない、いわば日本キリスト教の年  
老いたリベラリストであった。彼の理想主義はまだ生きていた。しかし  
その精神主義ではどうともできない人間悪の前で、彼は打ちひしがれた  
姿で「私は衷心憂慮に堪へないものがある」と嘆いた。この、かつての  
威勢など見る影もない、気弱な講演の中で彼は「渡瀬君の朝鮮伝道も、  
亦止むを得ざればなりだ」とその福音伝道の動機を弁護しようとした。  
しかし一九二一年九月、日本組合教会第三七回総会は多くの批判の前に  
立たされている朝鮮伝道部を廃止することを議決せざるをえなかった  
(『基督教世界』大正10・9・22)。

海老名はリベラリストであるはるかに上にナシヨナリストであった。  
彼は実験を重ねることによって「わがうちに生まれつつある大和魂はキ  
リスト魂と一致しつつある」と告白するほどであった。そのために「ま  
すます国家を愛せずにはいられない」といった<sup>(11)</sup>。彼は日本人のキリスト  
教を唱えるあまり、朝鮮人のキリスト教を認めることができなかった。  
朝鮮人には海老名がいだいた歴史観におけるように列国の膨張が神の国  
の実現に連なるとは、どうしても思えなかった。その歴史は支配され抑圧  
される者にとっては、死を意味したからであった。彼らも近代とともに  
はじめそのような進歩する歴史を期待したかも知らない。海老名の第一  
回朝鮮伝道旅行において、その講演に対して示された朝鮮人の感激は、そ  
のような期待から来たのかも知れない。しかし日本の植民地支配が進む

につれて進歩する歴史への期待などは、彼らの間から全く消えてなくな  
った。厳しい現実が海老名の説いた帝国主義的近代の歴史に対する樂觀  
を否認してしまったからであった。そして彼らは海老名が語るのとは全  
く違った朝鮮独自のキリスト教に向っていたからであった。ここでは朝  
鮮のキリスト者がいかに彼とは異なる発想をしていたかを示すために咸  
錫憲の『苦難の韓国民衆史』<sup>(12)</sup>から一節だけを引用することにしよう。

「自由を売った者は最後にはすべてを奪われることになる。自由を売  
って幸福になった国がどこにあり、個人がどこにあらうか。あるとす  
ればそれは檻の中の豚だけだ。……悪魔の現実がハナム(神)の精  
神をたとえ一時でもみえなくした……そう、一時だけだ」(一七五頁)  
咸錫憲は「それでも新郎の王は必ず来るだろう」(八二頁)とメシヤ  
待望の歴史観をのべた。帝国主義的異民族の支配が神の国であるはずが  
ない。韓国のキリスト者は超越的な終末、「新郎の王」が来臨する終末  
を待つ歴史観の中に生きようとした。それが彼らのキリスト教理解であ  
った。このキリスト教と触れることのできない伝道は、いかに善意なも  
のであっても、抑圧する者のキリスト教であった。ここに海老名のあの  
情熱的な朝鮮伝道論も碎けて行かざるをえなかった。彼の歴史観、そし  
て熊野義孝のいう彼の「思想の神学」は、間もなく日本国内において超  
国家主義の前で崩れる以前に、植民地朝鮮において崩れてしまったとい  
えるのではなからうか。

## 注

- (1) 渡瀬常吉『海老名弾正先生』三六二—三六三頁。
- (2) 同右、三六三頁、三六四頁、三六一頁。
- (3) 『海老名弾正説教集』新教出版社、一九七三年、二九六頁以下参照。
- (4) Reinhold Niebuhr, *Beyond Tragedy* (New York, 1965), p. 52.
- (5) 『国民道徳とキリスト教』六四—六五頁。
- (6) 土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』三〇九頁。
- (7) 『国民道徳とキリスト教』一三六頁以下。
- (8) 同右、一四一—一四二頁。
- (9) 土肥昭夫、前掲書三一—三二頁参照。
- (10) 吉野作造、松尾尊允編『中国・朝鮮論』平凡社、一九七〇年、参照。
- (11) 『海老名弾正説教集』一九六頁。
- (12) 一九八〇年、新教出版社から出版された全学鉉訳から引用。

## 結 び

海老名弾正は「思想の神学」を説いたといわれるほど、現代文明とキリスト教を包括して歴史的展望において眺めた実に総合的な思想家であった。その人間と同じように思想も広大であった。彼の目から見たら、同時代の多くの人々は実に狹隘に見えたかもしれない。しかしその根底にあった人間と歴史に対する徹底的な楽観論は、彼をして多くの歴史的事実を見られないようにした。キリストの支配が広まると反キリストの力も強大になるのが歴史である。彼は人間と歴史に対するブルジョア的近代主義的、偏向を持っていた。この課題をその後の日本のキリスト教

はどのように継承し克服しようとしたのであろうか。海老名が没した翌年に出版された渡瀬常吉の『海老名弾正先生』という伝記の中には、その時代の情勢を反映したのかつぎのような一節が挿入されている。

「海老名先生の伝を叙して、世界大戦に及ばんとするの日、少時ペンを止めて僅かに二週間前の武漢攻略を回顧せざるを得なかった。ただし支那事変に於ては、世界大戦当時と、日本の立場が全く反対となつて居て、其の僅々二十年の間に、世界の形勢は幾変遷、遂に曠古の大事変に逢著し、茲に日本の東西並に世界に対する新使命が高唱さるるに至った。而かも、それは先生が日夜祈求された処ではあったが、其の現前の姿は全く先生が予想され得ないものである。それらを思ひ合せて、先生をして今少しく生存せしめ、此の大事変を目の辺りに見せしめんか、先生の感慨は如何ばかり深かりしならんと思ふのである」  
(三八九頁)

海老名の思想を延長すれば、このような考えにまで至るといふのが、果して正しい解釈であろうか。海老名が憂慮してやまなかつた朝鮮も日本の手中で安定したように見えたし、満州、中国へと日本が伸びて行ったのは、彼が祝してやまない神の国の実現だといえる面があるかも知れない。これに対しては、一九三三年に出版された『日本国民と基督教』の序文が何かの暗示を与えてくれるかも知れない。これはもともと一九一二年出版の『国民道徳と基督教』を改題し第三篇として「断想

録」をつけ加えたものであった。海老名は高齢でもあったからであると思うが、一九一二年以来、経済、社会問題に触れていないことを不満足としながら、それは自分の専門ではないので、精神的方面だけを論じようとしたと記した。いわばその後社会的なことについては語らなくなつたというのである。そしてかつて自分が展開した時論に対してはつぎのようにコメントした。

「前書発行当時は恰も日韓併合の時期であつたが、時代は大に進展して満州独立の宣言を聞く気運となつた。之は極めて自然的発展であつて、日韓併合の時より予想の出来たものである。唯余が主張したるが如くには内地人も進展せず、朝鮮人も覚醒せざりしは遺憾の至りである。当時若し余が主張したる所に耳を傾け、内地人が覚醒し又進展したならば、満州問題の如きは、遙により容易に解決することが出来たであろう。各狭隘なる愛国心に絆されて、天空快濶の気概に活躍することを得ず、兎角大発展の気運を逸するのであるが、満州に於ても亦同様の道を歩んで来たのである」(二―三頁)

これが海老名のその時代に対する時論であつたといえよう。もう日本化は文明化であり、それはまた神の国実現への道であるとは思つていなかったようである。しかしかつてのキリスト教的幻想はなくなつても、まだ膨張の歴史が歴史の必然であると思つていたようである。ただ現実には「狭隘なる愛国心」のために「列国の大家族主義」からはほど遠いと

思い、それはまだ人々が愚昧なる精神状況を脱していないからであると考えていたといえよう。キリスト教リベラリズムの近代主義的進歩主義が、彼の心の中でこのようにかすかながらも息づいていたといえるのかも知れない。海老名は自分の思想が根底から崩れ去つたという反省は、持ちえなかつたようである。しかしそこには超国家主義の狂熱に進む可能性は少なく、どちらかというところ「精神的方面を論議」することに限ろうとする逃避がめばえたように見える。これが私には明治のナシヨナリスト、啓蒙主義者キリスト者たちが、昭和の年代になつてたどらねばならなかつた運命の道であつたように思えてならない。

〔比較文化研究所客員教授(キリスト教思想史) 一九七九年度  
個人研究員〕